

幻滅と隠棲

——セナンクルの社会性——

大野 英 二 郎

『オーベルマン』の第一信は、主人公がフランスを出奔しスイスに入つて、新天地での生活をはじめたことの報告である。

「今、僕はすべてを捨てて、こうして見知らぬ土地にいます。(……) はじめて自分という者の存在を感じる事ができうれしくなりました。(……) とうとう僕は自分自身になったのです。⁽¹⁾」

それは断ち切られるべき様々な桎梏が存在していたことを示している。彼はフランスにおいて、自己の存在を実感できぬ厭うべき状況の中におかれていた。

「スイスを旅行者として、あるいは物見高い人間として歩き回ろうとは思っておりません。僕はスイスに住みたい。なぜなら他の場所では居心地が悪いからです。⁽²⁾」

オーベルマンが捨ててきた国で感じていた不満とは、志向する体験によつて明らかになるように、単にフランス対スイスといった制度や国民性の相違だけではなく、文明対自然、あるいは都会対田園という関係で捉えられるべき人間社会への倦厭の情でもあった。それゆえ彼は孤独を求め、アルプスの偉観に打たれ、氷河に踏み入り岸壁をよじ登り、

ひたすらその神々しいまでの自然との合一を目指す。それらの体験はつかの間の陶醉的な時間を与えはするだろう。しかし、

「人里へと下っていきながら僕は自分がまた様々な憂悶や倦怠の長い鎖を身につけていくような気がしました。」⁽³⁾
終末は特権的体験の必然でもあった。

主人公はまた自己の出生によって結びつけられていた祖国フランスを完全に捨て去ることもできなかった。少なくとも物理的に彼とフランスの関係が途切れることはない。いかなる事情によってか、彼はパリに戻らざるをえなくなる。そして彼はその憂苦が他ならぬ自己の内面から発していることに気づくであろう。そこから物語はひたすら内向し、フォンテヌブローでの生活を経て再びスイスを訪れるまで、孤独な隠者の独白めいた色彩を強めていく。彼の努力は自己の心の平安を求めるとともに、それを保証しうる場、安住の地を見出すことに傾けられる。その土地は彼が宇宙的秩序への同化を感じたアルプスの山頂と種々の鉄鎖につながれることを余儀なくされる社会との中間に位置しているのだろうか。主人公は一種の亡命者として、新たな祖国⁽⁴⁾故郷を探究する旅を続ける。果たして彼が探し求めた真の祖国とはいかなる属性を持つものであったのか。

メルランがいみじくも指摘したように、エティエンヌ・ピヴェール・ド・セナンクル（一七七〇—一八四六）は自己の創造した『オーベルマン』の崇拜者達による犠牲となった。⁽⁴⁾作中人物オーベルマンの体験が、年齢や経歴との類似から、作者の実人生の記録として解釈されることがあまりにも多かつたからである。作家セナンクルの存在の認知は、『オーベルマン』をその手記と見なして、主人公を作者の実像と捉える後続世代の誤解から始まったとさえいえるだろう。⁽⁵⁾しかも作品が発見、評価されたのは皮肉にも彼自身の関心や主軸となる著作の傾向がすでに『オーベルマン』から隔たった場へと移った後であった。彼の晩年の文業の過半はこの誤解から来る人気に因應するために費やされたということさえできる。文学史においても彼は長くその誤解の中に、さらには忘却の中にとどまらざるを得なか

った。第二次大戦後に彼の作品を精査してその実人生と比較し、事実の歪曲や虚構の存在することを指摘したモンゲロン⁽⁶⁾の研究も、実は『オーベルマン』の中により正確に作者自身の投影を見きわめようと言う努力に他ならなかった。それに対しセナंकールを何より作家として位置づけ、その著作群を一つの想像空間として捉え、そこに固有の特性を見出そうとしたのは、さらに時を下ったレーモンやルガル⁽⁷⁾ディディエに代表される動きであった。作品はようやく作家個人と切り離されて独立した地位を得る。だがそれらの研究が主としてセナंकールのロマネスクな、ないしは文学的な作品群を対象にして、非時間的、創造的要素にのみ観察を集中した結果、作品と時代との関係は等閑にされることになった。

セナंकールは夢想や瞑想という題名を冠した自己の省察を記録する一連の作品を残している。『オーベルマン』もその多くの部分が後に『夢想』のなかに取り込まれ、一時期作者によってその再版が放棄されたのであった。そして『夢想』はまた次の著作へと組み込まれていく。セナंकールが自己の著作をまとめて究極的な一つの作品に総合しようという意図を持ち続けていたからである。彼は一度発表した著作をさらに推敲し、改版を重ね、そして複数の作品を融合、再生、展開していくのであった。メルランの言う「モザイクのシステム」⁽⁸⁾である。したがって彼の諸著作は、いずれもこの実現されることのなかった最終的著作への準備、ないしは終生暖め続けた主題の様々な変奏として捉えることができるだろう。⁽⁹⁾そして彼の主題とはつまるところ自身の根源的懐疑の解明、人間とはなにか、人生とはなにかと言う問題に他ならなかった。すなわちセナंकールの著作群とは第一に一つの有機的総体として捉えられねばならず、第二には時間相のもとにその変化生成を観察されなければならない。もとより彼の著作を網羅的に論ずることは物理的に不可能ではあるが、刊行されているテキストをできる限り視野に入れながらその相貌を明らかにすべく観察を試みよう。

セナंकールの著作の変遷、変成を観察すれば、作中人物オーベルマンが後世に対してあまりに見事に演じきった

ように、作家の思考、その世界がただ一筋に孤立化、内面化の道をたどったわけではないことが理解されるだろう。彼の社会観、帰属意識とはどのようなものであったのか。それらは果たして時代状況に対してどのような関係を持ち、変化を遂げたのであろうか。

* * *

セナクールは最初の刊行作品である一七九二年の『原初の時代、人間の不確定性について』において原初の人間に関する考察を行っている。論述されるのは黄金時代としての原初の時代であって、人間存在の理想的状況を示す。作者の問題意識はルソーに類似⁽¹⁰⁾し、その手法は思弁的であっていわば仮説モデルの検討であり、時代状況が直接言及されることはなく、時折援用される人類学的知識も文献によって得られたものに違いない。しかしこのようにして論じられる原初の時代は必然的に著者の同時代を浮かび上がらせるとともに、彼の終末論的ともいべき現実認識を明らかにする。繰り返し喚起される黙示録的世界は時代の状況、残酷、混乱等の背景を抜きにして考えることはできない。

「それに対して疑義が示されたり、何物によっても証明されていないことを、熱烈に主張するという人間の性向はすべての人々を分断し、かしこで血を流させることになった。(……)未来に約束されていた善はより一層大きな悪にとって代わり、喜びは悲惨に、享樂は欠乏に、一般意志の単一性は専制政治に、(……)守護者としての崇高な神の概念は復讐者としての潜主の恐怖にとって変わった⁽¹¹⁾。」

それは善を実現すべく始められたはずの革命によって引き起こされた混乱の実態であろう。作者が社会に対して抱き続けた倦厭の情、悲観的世界観はその時代認識に由来しているといえるのである。⁽¹²⁾

けれどもこの著作が客観的な文明論であるより以上にセナンクル個人の省察であることを明白にするのは、何よりも問題設定の起点として、自己に対する根源的疑問が表明されていることにあるだろう。

「私はなにか。私はそれを知らない。誰によって、そしてなぜ私は存在しているのか。」⁽¹³⁾

だがこの疑問はデカルト的な世界観の構築へ向かうものではない。彼は続けて記す。

「私は存在する、そして私だけが存在しているわけではない。(……) この事物の秩序の中において、私との関係はどのようなものなのか。」⁽¹⁴⁾

彼はア priori な他者の存在を、そして複数の他者の存在を、認識せざるを得ない。したがって自己の存在は他との関係において捉えられる。複数の他者が社会を構成することになるのは言うまでもない。自己陶醉的色彩の濃いいわゆるロマン主義的自意識に較べて、これをセナンクルの理知的性格と呼んでもよいであろうが、また彼の抜きがたい社会意識として確認することもできるだろう。それは同時代の激動する社会に対する認識と表裏をなしている。そして彼の自我と社会の間には埋めることのできぬ溝が横たわっていた。それゆえセナンクルは社会的存在であり続けながら、あるいは社会的存在であるがゆえに、孤独を求め、孤独に苛まれると言うアイロニーを生きることを強いられるのだ。

この『原初の時代、人間の不確定性について』の初版の扉には、作者の名前の代わりに「アルプスの夢想家」と記されていて、この表記は以後しばしば用いられることになる。ルソーの影響はここでも明白であろう。さらに作品の末尾には「夢想」と題された二〇頁余の文章が付されていて、自然の中での自意識の解消、寂滅といった夢想が語られ、人間の卑小さ、虚無の否定的な相が強調される。夢想はやがて「私」を宮廷の中へと導いて、寓意的な調子の中に、社会の愚劣、人智の限界などを示す。これらの事柄はいずれもスイスへと出奔した作者自身の体験を示唆するものであろうし、人類の営為を社会から距離をおいて観察するというセナンクルの基本的立場を明かにするものでも

あろう。後年の『オーベルマン』等の作品群に共通する視点がすでに示されているのである。

一七九三年に刊行され、前作とは対をなす『現今の世代について（人間の不条理）』の中では文明化された時代における人間についての観察が展開される⁽¹⁵⁾。

「現在の人間は人為の人間であつて、自然の人間ではない。（……）彼はすべての形をゆがめてしまう。」⁽¹⁶⁾

「我々の悪習、誤謬を鑑みれば、人類の退化を驚くには当たらない。」⁽¹⁷⁾

記述は百科全書的に、ビュフォンなどの著作からの知識を豊富に援用するものであつて、たとえば日本についてはケンペルが引かれるが、世界諸地域の人間存在に関して各民族の世界観、宗教観をパノラマ的に比較し、それらを相対化して考察を深めていく。そして現存する種々の差異を超えてあらわになる文明による墮落を指摘し、原初の無垢を強調する結論へと到る。すなわち人間の営為、文化というものの愚かさを失われた自然と鋭く対立させる。この作品においても著者を取り巻いていた時代状況が直接表出されることはないが、人類の現在に対する痛烈な批判と、未来に対する悲観的な結論は何よりセナンクールの時代認識を物語るものだろう。

「全体の幸福は個の絶えざる犠牲によって成り立っているのではないか。（……）だが観念的存在である総体を現実の存在であるその成員よりも偏愛するとは、不条理の極みであり、また少数が支配しているすべての政府の基本原理である。」⁽¹⁸⁾

「現代の政府はほとんどが専制的であり、制度は不条理であり、宗教は大多数の民族から糾弾されている。」⁽¹⁹⁾

社会の悪と悲惨を目の当たりにしながら、彼はルソー流の一般意志への還元といった抽象的システムに解決を託すことはできず、またそれ以外の諸制度の有効性を信ずることもできない。いやむしろ全体のために個を犠牲にしなければならぬ社会状況を否定する。そして全体と個、公と私、外面と内面、いささか図式的ともいえる二分法によってセナンクールは世界の悪と不条理の所在を示す。彼にとって個我が還元不可能なものに他ならないからである。全体

と個の対立は守るべき価値とよって立つ抵抗の根拠がどこにあるかを明らかにすることにもなる。

「社会の結合はその成員に対して、彼らの主たる願望が全体の福祉にあることを要求する。だが個々の人間の原初からの本能は自己愛である。⁽²⁰⁾」

自己愛は決して誤った感情とはされない。なぜならそれこそが本来の善である自然＝本質の発現なのであり、全体として標榜されるものは自然から切り離され歪曲された一部集団に過ぎぬのだから。

「世論とは誤りであり内面の声が真実である。⁽²¹⁾」

このように個を位置づければ、当然、集団への盲目的な帰属意識、ファナティックな愛国心は厭われるものになる。

「自己愛がすべての生物の原動力である。つまり快樂をえることがすべて生きるものの唯一の目的なのだ。動物にあつては快樂をえることはその欲求を満たすことであり、それを超えれば、もはや何も欲せず、何も想像しない。
(……) 人間はこの境界を超えてから、次第に自然全体を自分に結びつけて考えるようになった。この食欲さはそれぞれの民族において称揚される祖国愛によって神聖なものとされ、人々を結束させつつ、彼らを人類全体からは切り放してしまった。この食欲さは、美德と見なされて、それぞれの国民に侵略と征服の嗜好を吹き込んだのである。⁽²²⁾」

文明を糾弾する背後に時代のイデオロギーに対する反発があつたことは次のような一文からも察することができる。
観念的理想に対して彼は現実の幸福を対置させる。

「人間は知的なるものを夢見るや退廃の中におかれ、その定かならぬ夢に重要性を見出すや不幸になるのである。
(……) 唯一存在している現在を、人間にとっては決して到来することのない未来のために犠牲にすること、(……) それこそ私が退廃と呼ぶものなのである。⁽²³⁾」

彼の思い描く社会の未来像が、この愚かさを脱しないかぎり、きわめて悲観的なものとなるのは当然でもあろう。そ

の予感様々な民族や国々を通観して一層堅く信じざるをえなくなるものであった。

「現在の地上に至福は存在しない。⁽²⁴⁾」

セナンクールは人類の完成可能性という概念には否定的であつて、社会が改善されぬことを見きわめた以上、論理的必然として、そこからの脱離が求められるのであった。そして至福は抽象的未来にではなく具体的現在に探求されなければならない。

* * *

このような経緯に立てば、セナンクールの人類に関する考察、全体に向けられていたまなざしが個人へ、自己へと転じられていったのも当然であろう。彼の関心の変化は、やがて、『オーベルマン』初版以降いく度か彼の著作の題辞として掲げられる、「人類ではなく人間を学べ」というピタゴラスの言葉によって象徴的に表現されることになる。人間の置かれた状況の悲惨や愚劣の認識が、それまでの作品においては百科全書的な知識を背景に社会や制度全体を対象とする考察からもたらされたとするなら、彼の関心は個人それも自分自身に注がれて、主としてモラルや個人の内省的な生活方法と言った水準での問題の解決を志向するものになる。けれども不幸なことにその個我は根源的な懷疑にとらわれていて、たとえ自由と独立の中に置かれたとしても、決してその境遇を享受することができない。社会の変革不可能性と捨て去ることのできぬ自我の不安、そこから現実を超克する手段としての想像力へと傾斜していく。彼の思考の展開はロマネスクな空間の創造と分かち難く結びつき、その作品は文学的色彩を濃くする。この内面化の方向性については当時政治的言説がさらされていた危険をも考慮に入れるべきでもあろう。折りからフランスは恐怖政治の時代に突入していた。後述するように、セナンクールが時代の社会について無関心であつたとは考えられない。

時代は彼に悲観的な歴史認識を与えるとともに、その内省化に拍車をかけ、より非政治的な言説の発表へと導いていったといえるだろう。

内観の傾向を示す最初のロマネスクな作品は、一七九五年、共和国歴三年にパリで発表された『アルドマンあるいは人の世に埋もれる幸福』であろう。この作品は、自然の中での簡素で牧歌的な伝統的生活に対する賛歌であって、主人公は社会の喧噪を離れ山中へと入っていき、その感懷を友人へと書き送る。この設定が後年の『オーベルマン』を予告するものであることは言うまでもない。他という存在から身を離し、主人公は自己を注視する。

「私が今取り組もうと思うのは自分のこと、自分のことだけである。まず自分がどうしたら、人の世に埋もれてし
かし選ばれた境遇に身をおいて、幸福で賢明になれるのかを究めよう。」⁽²⁵⁾

このような述懐は、一方では彼の言う「癒しがたい倦怠」⁽²⁶⁾の故でもあるが、他方では明確に社会を拒絶しようとする意志の現れとして捉えることもできよう。「選ばれた境遇」とはアルドマンがその生活の模範として引く「イナレスあるいは人間の将来の運命についての考察」によれば山地と低地、自然と都会を対立させて、山中に隠遁することに他ならない。「いつまでもよそへよそへと身を投じていく」⁽²⁷⁾ことになる都会の雑踏混乱は虚無をのみ残す。アルドマンは続けて「身を落ちつけること、自分のところを得ること、そして外界の出来事に影響されない常に変わらぬ生活様式を身につけることが必要である。」⁽²⁸⁾と記す。自然に対する志向と都会に対する嫌悪はセナンクルの初期の著作全体に遍在している。つまり隠棲とは決して社会を絶縁忘却することではなく、社会を意識しながら、一種の否定的態度表明として社会から距離を保つことを意味するのである。

けれども主人公アルドマンが問題の解決を見出し、その憂苦の解消をなすのは孤独の中にはなかった。彼は、都会において他人の中傷にさらされていたジュリーという伴侶を得て、山間の牧草地に、自分たちだけの農園を創造して、そこを安住の地とする。すなわち彼の理想郷とは原初的で素朴ないわば『ポールとヴィルジニー』的な空間とし

て提示されるのであった。このトポグラフィックな設定は以後セナンクールの作品群に繰り返し現れる。その想像の源泉に作者自身のスイスにおける体験があることは疑いを容れないし、それがルソーに端を発する潮流の中にあったことは今更繰り返すまでもないだろう。⁽²⁹⁾

一八〇二年には『人間の原初の本質に関する夢想』が刊行される。著者の企図の一つは、

「いかなる制度が自然に本質としての社会的人間にふさわしいものであるかを、つまり人間にとって可能な形態のうちのどれがもつとも容易で幸福なものであるかを、探究すること」⁽³⁰⁾

でもあった。けれども夢想という形式をとったことは何より自身の自由な発想を尊重しようとしたためであろうし、客観性を掲げる社会思想なるものの持ついかかわしさを認識していたからに違いない。しかも彼は思索の目的を個人の幸福の探究に定めている。その意味において彼の思考方法は最初期の百科全書的知識に立脚した思弁とは明らかに異なっており、より内密な感情からの発想になる。彼の個性化された関心はまず人類全体、社会制度に向けられその変革の可能性を模索するが、彼によれば社会とは何より自然発生的な紐帯の総合であって、人工的な構築物であってはならないのであった。したがって祖国に故郷もまた個人の感性と想像力の圏内に収まるものでなければならぬ。

「ある人間の属する都市が他の都市と同じようであるならば、彼は祖国を持たぬことになる。かしこに祖国を見出し得るなら、結局それはどこにも存在しない。同じようにして生きることができるなら、彼にとってはどこで生活しようと同じことだからだ。(……)彼は自分の祖国愛を論ずるであろうが、祖国愛とは理知的に論じ得ぬものである」⁽³¹⁾

それは時代のイデオロギーとしての祖国に対する彼なりの抵抗であり、また国家という概念の否定的評価の発現でもあるであろう。

「国家の中のすべてはやがて失われるであろうし腐敗して行くだろう。いやむしろはや何れも失われるものはない」⁽³²⁾

このような彼の思考は、最後におかれた「第一七番目の夢想」において、個人の幸福のためには島のような限定された空間や、アルプスのように人里離れた場所への隠棲が必要であるとする結論へと導かれていく。⁽³³⁾つまり彼の言う祖国愛とは愛郷精神ともいいかえられるべきであって、個が所属する小規模で均質な友愛的共同体の存する、限定された範囲の土地に対する愛着を超えるものではなく、観念的存在に過ぎぬ国家に対する忠誠である愛国心とは対立する。尊重すべきはあくまで牧歌的な土地への執着、素朴な共同体生活への郷愁なのである。⁽³⁴⁾

祖国＝故郷像が具体性を帯びれば、それが文学的表現によりよくなじむのは自明であろう。一八〇四年発表の『オーベルマン』とはまさに主人公の行動を通じて理想郷、終の棲家とするに足る新たな故郷の姿を克明に描こうとする試みであったということもできる。ロマネスクな虚構は存在するものの、この作品においては作者の自我がより直截に表現されていて、彼の青年期における自己実現の過程が具体的に語られていく。しかしこれを青年セナंकールの手記であると捉える愚を繰り返してはならない。語られる体験と執筆時期との時間的隔たりを考慮すれば、たとえば主人公の社会からの出奔は、事実の反映である以上に、作者が構築する物語の発端に他ならず、作者の自己および社会省察の結果であったと考えるべきであろう。すなわち作品の中において社会を離脱することとは、青年の客気に満ちた行為であるよりも、すでに三〇才をこえていた作者の文学的選択であったのだ。

『オーベルマン』前半に語られる主人公の彷徨はセナंकール自身の実人生をほぼなぞるものといつてよい。けれどもそれとても「作者」の側からの位置づけがなされている。たとえば第一信の日付は「七月八日」であるが、伝記的事実としては一七八九年七月一四日に学業を終えたセナंकールが出奔しスイスに入るのは八月一四日のことと確認されている。この相違はたんなる錯誤ではあり得ない。なぜなら、彼は書きためていたノートあるいは備忘録をもとに作品を執筆したと推測されるが、サント＝ブーヴの手に渡ることになるその資料の表紙には「一七八九年八月一四日より一八〇九年一二月三十一日」と記されていたという。⁽³⁵⁾他の記述を見ても実人生における重要事件の日付につ

いてセナンクルが正確な記憶ないしは記録を保持していたことは明白であつて、その変更には何らかの動機が介在したと考えるべきであろう。作者の実人生における体験は作中人物の行動から異化されるべき意味を有していたに違いない。モングロンの研究に明らかなように、一七八九年夏、一八才のセナンクルの出走は、父親から聖職者の道を強制されたことに対する反発が原因であつて個人的家庭的な問題に過ぎず、当時の社会情勢に直接反応しての結果ではない。⁽³⁶⁾けれどもこの出来事を契機に青年の人生は暗転する。スイス、フリブルにおける生活は、彼を追うようにしてフランスから流入した亡命者達との接触を通じて若きセナンクルに社会の動乱のなんたるかを教え、やがてフランス行を試みた際に三度にわたつて繰り返された逮捕劇は彼の中に国家に対する不信と自己の境遇に対する不安を深く植え付けるのであつた。実家は破産し、またフリブルでの結婚は夫婦の不和をしかもたらさない。⁽³⁷⁾比較的富裕な収税吏の家庭に生まれたセナンクルは革命の進行によつて物心両面での平穩を失い、また理想を喧伝する政治がいかなる悲惨と混乱を生み出すかを目の当たりにするのであつた。彼は社会の一隅に逼塞して棲息することを余儀なくされて、貧窮との戦いは晩年に年金を受給されるようになるまで続いた。このような公私の現実とりわけ革命に對する幻滅は彼の世界觀に強い影響を与えずにはいられないだろう。一種の遺言として書き残した文書の中で彼は、

「かつて革命の非常事態がわが身に引き起こした結末に對して戦い続けたがために疲労困憊した」⁽³⁸⁾

と革命が私生活に与えた打撃について明記し、自分の死に当たつて公權力が介入せぬことを強く望んで、権力に対する不信をあらわにすることになる。中年に達した作者セナンクルが自己の人生を回顧する時、彼はそれが時代の荒波によつて翻弄され続けたことを、さらには自己の人生の転換点が歴史的に見て象徴的な日付に位置していたことを認識せざるをえないだろう。しかしながら内省的な物語を紡ごうという意図は、語られる体験が存在の内面と結びつき、深奥からの真情の流露として認識されるものであることを要請する。スイスの風物も、アルプスの山々も、ルソ一の自然觀に裏付けられて人間の原初的自由と結びつくものでなければならぬ。物語が主人公の祖国からの脱出

以後を語りながら、彼のそれまでの生活、幼年時代や出奔に至る経緯については全く触れていない点にも注目すべきであろう。⁽³⁹⁾『オーベルマン』はただ主人公の新たな生活のみを追って展開する。作者は主人公の体験が政治的社会的な文脈にからめ取られてしまうことを危惧し、忌避したのである。すなわち作品においてはその日付を操作して、その発端をあえてフランス革命勃発時よりも繰り上げ、さらにはその年をも消し去っていることに作者の文学的意図を確認することができるだろう。それは一七九九年から一八〇一年、作品執筆時期の作者の側からの操作なのであって、若きセナंकールが自己を政治的社会的文脈において把握していたわけでは必ずしもない。「作者」セナंकールこそが時代状況を極力作品から排除しようと試み、社会状況に対してきわめて否定的な反応を示したのである。かくして主人公の出奔によって始まるオーベルマンの物語は、現実社会から離脱しての理想郷の探究譚となる。⁽⁴⁰⁾彼が探し続けるのは安住の地、いわば真の祖国＝故郷なのである。いいかえれば主人公を捉えて離さぬ不安の一つは、祖国を失った者の焦燥でもあった。

「すべては冷たく、すべては虚しい。皆、追放の地で長らえているだけです。嫌悪感や屈辱のただ中であって、自分の新たな祖国を思い描いては、倦怠に疲れた心を休めているのです。」⁽⁴¹⁾

すでに触れたように、スイスに入って程なくして彼は自然の偉観との合一を実感しえたものではあったが、それは高山における極限的かつ限定的体験でしかなかった。アルプスの山嶺は所詮、終の棲家とすることが可能な環境ではない。つまり純粹清浄な自然を志向しながらも、理想の達成を日常の生活においては追求せざるをえず、彼は各地を遍歴することを余儀なくされる。

七年の後にスイスに戻ってみれば、感動はもはや色あせていて、凡庸な現実のみが主人公の前に広がる。

「僕は今スイスにいますが、喜びもなく、倦怠に満ちています。」⁽⁴²⁾

それは倦怠が感性を蝕んでいったことの証左でもあった。社会を嫌厭して離脱し、孤独を求めながらも、なお彼は自

分が社会的存在であるとの認識を放棄しえない。そして孤独に安んじることもしできない。孤独に打ちひしがれ、社会に悔恨を込めたまなざしを投げかけながら、彼は孤独と社会の二極の間に逡巡を続ける。

「運命は僕に妻も子供も祖国をも与えなかった。どのような不安が僕を孤立させ、他の人々のように世間という舞台で役割を演じることを妨げることになったものか。」⁽⁴³⁾

単に旅行者としてスイスに滞在することはもはや不安を増大させることでしかない。定住すること、生活の中に平安を見出すことを彼が望むようになるのは当然であろう。それは彼自身が「与えられていない」と認識していた祖国^{II}故郷の発見あるいは創出の願望でもある。

オーベルマンは、アルドマンと同様に、スイスの自然に抱かれたイマンストロームという谷間に隠棲の場所を見出し、農場を得る。

「僕はとうとう自分の家にいます。しかもそれはアルプスの中なのです。」⁽⁴⁴⁾

「僕が身を落ちつけたスイスのこの地方はまるで僕の祖国^{II}故郷のように、あるいは幼い頃幸せな年月を過ごした地方であるかのようになりました。」⁽⁴⁵⁾

もちろん俗塵を離れた環境に安住の地を得たからと言ってオーベルマンの憂鬱が解消されるわけではない。倦怠は胸中深く巣くっている。しかし彼はフォンサルブという友人の到着により、友愛関係に基づく共同生活を始めることによって自己に固有の、だが決して孤独感に苛まれることのない空間を獲得する。それまで一人で負うて来た憂悶、孤独感を克服する可能性を主人公は見出すのである。

「孤立した生活と健康以上のなにかが見えてきました(……)我々はもはやヒロイズムの年齢ではないのです。(……)大層な事柄には関心がありません。」⁽⁴⁶⁾

さらにはハンスという従僕をも得て生活は落着き、質素ながらも快適なものになる。隠棲における人間関係が『アル

ドマン』のように結婚という形態によって安定したものにならないのは、作者自身の不幸な結婚生活の反映あるいは制度としての結婚の非人間性に対する批判のためであろうか。夫婦よりも、より自由で深く個人の孤立を尊重する友人関係が選択されるのである。つけ加えれば、このイマンストロームとは實在の土地ではなく、また主人公の安逸の体験も作者の实人生には不在であった。セナンクールは一八〇二年にスイスを訪れるものの、そこに見出したのは妻が不義の子をもうけていたという現実であり、一年足らずしてパリに戻ると、以後スイスに足を踏み入れることはなかった。セナンクールとスイスの関係は作中人物に較べるとごく短時間のものでしかない。したがって、パリにあって完全な虚構として記されたものか、スイスを訪れて現実の苦渋を払うべく想像されたものであるのか、イマンストロームに関する部分がいつ執筆されたかについては正確には明らかではないが、いずれにせよ文明社会からは隔たつて自然の中で繰り広げられるこの友愛的共同体こそ、セナンクールが作品によって示そうとしたロマネスクな理想空間、彼自身には与えられることのなかった祖国Ⅱ故郷であるといえるだろう。「巨大な流れ」を意味するその地名のよゝに主人公はそこで大きな秩序たる自然Ⅱ本質に身を委ねることを許されるのだ。

個我に対する関心ないしは執着と、人類全体に対する抽象的興味はセナンクールの思考の二面性として常に存在し続けていたが、『オーベルマン』においては前者への傾斜が表現されたといえるだろう。しかし想像による理想郷の構築も絶えざる社会からの圧力、時代の現実の前ではあえかなものでしかない。さらに社会化されたコギトを出発点にする以上、セナンクールの思考が内向的な文学的虚構にとどまれるわけでもなかった。やがて彼の関心はより自由な表現形態を試行し、いくつかの異なるジャンルに手を染めると同時に、自己の文業の中心には夢想、瞑想という形式を選びとっていくように観察される。

このような文脈をたどれば一八〇六年に刊行され、以後改版を返すことになる『恋愛論』も単なる男女間の機微を分析した論考ではありえない。

「孤立した人間は決して完全なものではない。⁽⁴⁷⁾」

すなわち恋愛とは他との関わりを持たざるを得ぬ個の存在様態の一つなのであり、したがってこの著作においてもまた個の自由と独立が問題となる。既存の道德、キリスト教の教義などが批判の対象となり、わけても結婚は個の自由を拘束する制度として否定的に捉えられて、離婚の必要が説かれることにもなる。それは作者の実生活の反映としても、またその自由主義的な立場の表明としても読みとることができらるだろう。

一八〇七年に出版される喜劇『ヴァロンブレ』では、理性と徳の主人公ヴァロンブレに対して浮薄なる社交の人士たちが奸計を仕掛け、その失敗によって彼が逆に清純な女性と結ばれ自己の生き方を全うするまでを描く。主人公は地方の領地を家父長的な權威でおさめており、徳高く生きることによって必然的に社会からは距離を置き、すなわち一種の隠者として棲息する。世俗の人間はその生き方を理解しない。

「皆てんでにあのかた(ヴァロンブレ)のことを説明するのですもの。ある人たちは徳高き方として、またある人たちはかなり変わった、特別な方、つまり完全にはこの社交界の人間ではなく、そこから追放すべき人間なのだ⁽⁴⁸⁾。」けれども、最終的には主人公の奉じる生き方を称揚するものであるにしろ、わざわざ喜劇と銘打ったように、この作

品は社交界の人士の軽薄さのみならず主人公の生き方をも相対化して両者の葛藤を提示する。社会と自然、社交と瞑想、奢侈と素朴など、様々な対立する価値が登場人物達によって表され、社交人である主人公の弟はヴァロンブレに、

「あなたは瞑想に耽り、私は行動する。あなたは働き、私は楽しむ。あなたは息をしているだけだけれども私は生きています。(……) 自然を崇拜しておられるのでしょうか。だったらもつと首尾一貫したらいかがでしょう。」

この秩序、この調和はどこかにいつてしまうのですか。人生が善でないようなことが一体あるのですか。⁽⁴⁹⁾といわば現実肯定、快樂主義的な生き方を訴える、それに対してヴァロンブレは、

「人間達はそうは望まなかったのだ。⁽⁵⁰⁾」

と人類にとって現実社会におかれた人生が善であることを否定し、悲観的かつ禁欲的態度を明確にする。それはアルドマンやオーベルマンの系譜に属する思考形態であろう。そもそもこの主人公の名は「日陰の谷」を意味しており、かのイマンストロームとの関連は明白である。だがこの喜劇は、隠者の空間のみを描くのではなく、社会の存在なしは脅威を積極的に導き入れてそれとの葛藤を示すことによって、主人公の生活空間の意味を際立たせる。⁽⁵¹⁾ 社会は回避すべきものというよりも、一度は対峙し対決せざるをえない存在として提示されるのである。『オーベルマン』に較べて、より社会化された状況が表現されているといえようか。

一八〇九年に改版された『夢想』はこの時点における個人の帰属に関するセナンクールの考え、祖国観を十全に展開する。⁽⁵²⁾ ほぼその巻末に新たに加えられた「第四二番目の夢想」はまず人間が限定された存在であることを示し、個人は皆異なった性質を持つと説く。しかるに社会の秩序とは個性を捨象した存在としての人間を仮定し、つまり人間をすべて均一で可算的な単位としてしか捉えない。そこに社会の矛盾の発生する原因があり、とりわけ国家における人口の増大は一種の病理として地球上をおおう。国家は人民に対しては「国」を与えこそすれ、「祖国」を約束するものではない。

「真の祖国愛とは、個人の存在を補完するものすべてへと拡大した自己愛である。巨大な国家には祖国愛の模造品があり、それは愛国心と呼ばれる。この関係は装われた自尊心であって、個人の名誉を公の名声に結びつけるものでしかない。⁽⁵³⁾」

肥大した国家規模は個を圧殺するものでしかない。

「法は、国家を形成する社会の様態における、全員の意志の表現である。だが十万もの人間が共に思案してできあがった法など一体どこにあるであろう。⁽⁵⁴⁾」

セナンクールにとっては、歴史的に見て国家が個々の存在に有益であり得たのは古代ギリシャにおけるような小共和

国の場合か、あるいは巨大な国家における連邦制の場合でしかなかった。ここまでの論議はすでに初版においても概括的に示されていた。第二版が時代を反映するのは、時代のすでに巨大化した国家において衆愚化を避ける方法として天才の出現をあげている点にあるだろう。つまり統治すべく生まれついた天才が存在していて、統治を行うのである。そもそも徹底的な少数者として自己を規定し、賢者ないしは隠者たるの道を自らに課したセナンスールは、積極的に社会に関わりそれを統御していこうとする天才の存在に少なからぬ関心を持っていたかに観察される。もちろん彼我の資質の違いは十分認識した上ではあるが、超人の主題は繰り返し彼の著作に現れることになる。この概念がナポレオンの出現によって強く影響されたものであることは疑いを容れないだろう。

けれどもセナンスールの夢想は現実社会の問題に対しては十分に有効な解決を見出すには到らず、再び個人的なモラルのレベルへと降りていくのだった。

「真実を愛しそのことを人々に告げようと願う人々には、一つのことが残されている。よいと思うことを見つめそして示せ。(……) 完全に悪とみなされることは、いかなる時においてもはやせぬために。」⁽⁵⁵⁾

一八一〇年に記したとされる自伝的メモによれば、セナンスール個人はこの時点でも帰属定着の願望を抱きつつ、その願望を満たされることなく、不安を抱きながら彷徨を続けていたことが理解される。それは人生自体に対する不安でもあろう。

「かくして私は三九歳半に到達した。(……) 数カ月後に自分がどこに住んでいることになるのかは私は知らない。」⁽⁵⁶⁾

* * *

しかしながら彼の著作は再び自閉的な様相を示すことにはならなかった。帝政後期から、とりわけ一八一四年から

セナクールは旺盛な社会的執筆活動を始めるからである。彼のテキストに対して、時代の社会はただ暗い影を投げかけるだけではなく、少なくともこの時期においては、直接的な作用を及ぼしたのである。文筆によって糊口をしのがねばならぬ個人的状況があつたことも事実であろうが、内容に目を向ければ彼が積極的に時局に関わつていこうとしていたことが理解される。したがって、青春時代に端を発する憂苦から逃れられぬまま社会に対して原理的懷疑批判の感情を持ち続け、時代から隔絶されたところに身をおきセナクールがひたすら自己の内面に沈潜したと考えるのは事実⁽⁵⁷⁾に反し、彼の人生を美化歪曲してしまうものであろう。何より彼は自己を社会的存在として捉えていた。この時期に発表された記事、論文は政治、文学、社会等多岐にわたり、『コンスチテューションネル』、『メルキュール・ド・フランス』、『ミネルヴ・リテレール』等の雑誌が活躍の場となつて、無署名のために必ずしも正確な数字は把握できぬものの、書誌によればその数は数百に上る。

たとえば百日天下の間に出版された『ナポレオンについて』と題された冊子は、当時の彼の視野の広がり⁽⁵⁸⁾を明瞭に示す。

「筆者は何よりもフランスの平安と不可侵を切望している。」⁽⁵⁹⁾

そしていくつかの留保を付記しつつも彼はナポレオンの事績を積極的に評価する。

「その逸脱、暴力、錯誤にも関わらず、ナポレオンは世紀の君主である。」⁽⁶⁰⁾

「彼の行政について私は元来これを無条件に評価するものでは全くなかつたが、結局栄えあるフランスは彼とともにあつたのである。」⁽⁶¹⁾

彼の批判は反動勢力、ブルボン王家とその支持者達に注がれ、彼の敵意はイギリスやロシアへと向けられる。このようなフランスに対する関心、その再生に対する願望とは、一度は断ち切ろうとした彼のフランスに対する紐帯の確認でもあろうし、またそれがかつては非難した愛国的情熱と呼ぶことさえできるかも知れない⁽⁶¹⁾。冊子刊行の状況からい

って皇帝の存在に政治的、社会的意義付けをすることは当然のことであつたろうが、それらは一種アリバイとしての政治的言説であつて、彼の関心は実はナポレオン個人に集中しているようにも思われる。文章には筆者のナポレオンに対する個人的共感、あるいは憧憬がより強くにじみでているのである。人間の歴史、とりわけ同時代の社会の変化に深く傷つきながら、あるいはその絶望のゆえに、彼は目の当たりにすることのできた新たな指導者に、社会の混乱を收拾しうる力量を、一縷の希望を見出したのだと考えることもできよう。セナンクールにとってナポレオンは二つの評価すべき特徴を持っていた。第一には卑俗で狭小な人間の否定、すなわち凡人を超える存在として認識される。劇的なまでの身の浮沈、有為転変もまた凡俗を超える人間がしのばねばならぬ運命であつた。オーベルマン⁶²孤高の人を創造したセナンクールにとって、超人、天才の意義は深切であり、個の尊厳と独立という点において彼の内省的諸著作と政治的論文は通底するのである。

「国王が何も悪をなさぬというだけでは十分ではない。個人の徳だけでは君主には不十分なのである。(……)ヨーロッパにおいては、そして激動の時代においてはより以上のことが、善をなすことが必要なのである。かつてオヴィエ⁽⁶²⁾においては尊い意志のみが君主たる属性をなしていたが、今やヨーロッパにおいては天才が要求されるのである。」

第二には新時代一九世紀におけるあるべき人間の姿としての位置づけである。ナポレオンは新しい価値観を体现し、旧世界と厳しく対立するものであつた。超人は社会から排斥されて孤高の生活をかこつたのではなく、逆に社会を革新し統率する存在になる力を備えている。

「ナポレオンは誰にもまして現代における偉人たるにふさわしい。願わくは彼が真に偉人であり、しかるべき構想に基づき、あるいは卓越した想像力によって、その偉業をなしとげんことを。そして彼が、毎日に古びていく過去のヨーロッパに對立して、現代のヨーロッパの頂点に位せんことを。」⁽⁶³⁾

セナンクールのこの意見は必ずしも時局迎合的なものではなかった。

「もしいくつかの点においてこれが権力者の一種の擁護であると思われても、私を批判しないで頂きたい。彼（ナポレオン）が君臨しているときに私が彼のことを口にしなかったことを思い出していたきたい。そうではなくて七カ月前、そして五カ月前に私は思いの丈のすべてを口にしたのである。」⁽⁶⁴⁾

ナポレオンを天才、この世の再生者として位置づける主旨は確かに他のいくつかの論文において繰り返されていたのであった。⁽⁶⁵⁾

さらにナポレオンを外国人として排斥する言説に対してはそれを偏狭と非難し、彼をフランス人として認めている点も興味深い。セナンクールにとって国家の枠組みの持つ不条理が明確であったためであるのか、あるいは帝政が実現したフランスの栄光を非難するに忍びがたいためであったからなのか。いずれにせよ彼にとってショウヴィニズムは拒絶すべきものであったことを考慮すれば、それは郷土＝故国に対する自然な愛着の発露として解釈すべきなのであろうか。だがセナンクールがありうべき社会として思い描くのは決して専制君主によって支配される体制ではありえない。個我的自立に対する執着からいっても自由主義的立場に立つことは当然であろう。⁽⁶⁶⁾

かくして王政復古期は自由主義的文筆家として各種の記事や論文を執筆することで経過していった。けれどもそれらの論文記事は集成されることなく、したがって彼の文業の中で正統的な位置を占めることはなかった。

一八三〇年の革命および社会的変化がどのように捉えられていたかは全く知ることができない。すでに老境にさしかかり、身体的故障に悩まされていたセナンクールはパリで逼塞した単調な生活を送っていたと推測される。⁽⁶⁷⁾ けれども後続世代によって『オーベルマン』の発見評価がなされると、それに促されるようにして彼は再び文学的作品に手をめめるようになる。とりわけ一八三三年は『オーベルマン』第二版、『イザベル』、『人間の原初の本質についての夢想』

第三版の刊行と、寡作家の彼にしては例外的に多作になる。それらは彼の本来の考えに沿った執筆活動からはやや離れており、文学的野心、経済的必要によって行われたと見ることもできよう。⁽⁶⁸⁾

再版された『オーベルマン』は表現内容ともに改変され、主人公の彷徨の終結点も変容を遂げる。⁽⁶⁹⁾ 書き足された第九〇信では、フォンサルプの妹、D***夫人のイマンストロームへの来訪が説明される。彼女こそは主人公が長くそして実らぬ思いを寄せていた女性なのであって、それまで主人公の低回する思いを様々に語ってロマネスクな要素が薄く、悪くいえば散漫であった物語は突如恋愛小説としての展開を示し、幸福な雰囲気に含まれる。その中で主人公は自問する。

「では何をすべきなのだろうか。結局僕にあたえられているのは書くことだけなのだと思う。⁽⁷⁰⁾」

隠者として生きる主人公は書物の執筆を決意する。彼の人生の達成はその書物の完成によって示されることになるだろう。かくしてオーベルマンの物語は出奔した主人公がようやくにしてたどり着いた安逸の中で作家になることを決意するまでを描くいわばプルースト的教養小説としての体裁をとるに到る。若い世代からの評価は作者に作品を復活させただけではなく、新たな彩りを付け加えることをも義務として課すものであったのだろうか。

『オーベルマン』の好評が『イザベル』刊行の背景にあったことは疑いを容れない。この作品もまた、すべてを捨てて新天地へと到着した女主人公の書簡によって始まっている。

「こうして私はあなたから遠く離れたところへ参りました。望んでのことです。一人、世間から離れて、心地よい習慣も捨ててしまいました。⁽⁷¹⁾」

執筆意図については作者自身が

「孤独な女性イザベルはオーベルマンとはいわば対をなす、彼の妹なのです。⁽⁷²⁾」

とサント＝ブーヴ宛に書き送っている。同じ書簡には『レリア』や『インディアナ』の名も記されていて、セナンク

ールが時代の文学的傾向に意を払いつつ『オーベルマン』のまさに姉妹編としてこの著作を世に送り出したことを示している。それは彼が時代に迎合して通俗的な作品を執筆したことではなく、むしろ彼が時代に対して先駆的な存在であつて、あまりにも早く創造してしまつたオーベルマンがようやく時代によって迎え入れられたことを意味して(73)いよう。すなわち脱出の願望はほとんど強迫観念として彼の内奥に固着していたのである。『イザベル』においては『オーベルマン』よりも小説的な展開を鮮明にしながら、さらに山中への隠棲が語られていることをも考えれば、彼が終生抱き続けた隠遁の主題の重要性、その前提として彼が抱いていたに違いない社会に対する違和感、疎外感の根深さがあらためて理解できるだろう。いいかえればセナンクルがその晩年において隠遁への意志をあらためて表明したとすれば、それはほとんど生理的な内向性に根ざすと同時に、長い社会観察と批判の結果、慎重な考量の結果と合致するものとして捉えなければならぬ。彼は晩年に到るまで、少なくとも精神的な次元においては、社会の持つ本質的非人間性に傷つき、帰属すべき空間を求めて彷徨を続けていたのであつた。

『イザベル』では、女性主人公の父親とその若き友人にして彼女の許婚者でもあるジュールがともにアメリカへと旅立ち、やがて父親は急逝、ジュールはイギリスの虜囚となつて狂氣にとらわれる。それを知つて悲しみに耐えるべくイザベルはグルノーブル近辺の山間部へ隠棲する。その場所は社会からは遠く隔たつて位置している。だがその距離も人生の静穏を保証するものではなかつた。災難は彼女の仮寓にまで容赦なく到達して、イザベルはフランスを離れざるをえず、ジュールが身を寄せていたヴァレンシアへと赴く。スペインの地が当時いかなる含意を持っていたかについては説明するまでもない。狂氣から解放されるかに見えたジュールは斃れて、イザベルは失意のあまりピレネー山中で自死を遂げる。物語の舞台は終始世俗社会から隔たつたところに設定されており、不幸に襲われる度に女主人公はすべてを捨て、自由と平安を求めて新たな土地へと赴く。忌避してきた社会としては、グルノーブルの町とパリの社交界が挿話的にその名を引かれるにすぎない。けれども社会の持つ否定的な力は圧倒的であつて、主人公が築

き上げたかに見えた牧歌的空間は悉く、三度にわたって、破壊されてしまう。このきわめて悲観的な展開は、『オーベルマン』二版の終末における幸福の予感ないしはその到来と著しい対照を示す。⁽⁷⁴⁾

『イザベル』の時代背景は、執政政府時代、帝政時代とスペイン戦争期、つまりおよそ一八二三年頃までであって、この時期の様々な社会的出来事が、作品中では六年間にわたる物語の時間内に凝縮されて主人公を取り巻く境遇に事をもたらししていくと指摘されている。⁽⁷⁵⁾しかし作者の関心は歴史を忠実に記述することではなく、ただ読者の記憶に新しい事件を示唆しながら、作中人物と社会の葛藤、より正確には社会の側からの有無を言わせぬ破壊的力による個人の受苦を描くことにあつたに違いない。

再び改変されて一八三三年第三版として世に問われた『夢想』にも同様の苦渋を見出すことができる。

「我々はあたかも配所にあるかのようにこの世にとどまっているのであって、憂愁に沈み、不在の祖国を懐かしんでは褒め称えるのです。」⁽⁷⁶⁾

けれどもそれは祖国を追われたからというよりも、時代社会によって祖国自体が不可逆的に変質させられた結果であつた。

「もし我々の間で祖国愛が消え去っていくように見えるとしたら、それは祖国愛が無益になったからではない。生まれ故郷が異国の土地に余りにも似すぎてしまったためである。現代の様々な政体は、その劣弱さと俗悪さの程度において皆似たような様相を呈している。」⁽⁷⁷⁾

そして「山」と題された第三七番目の夢想においては山懷に抱かれた素朴な人々の生活をまたしても称揚するのだが、その世界もいまや存亡の危機に瀕している。

「自由な人々よ、かく生きよ。そして急げ、揺るぎない自然が衰微する日が迫っているのだから。すべての土地は掘り返され、すべての人は自身の業によって無力にさせられるのだ。」⁽⁷⁸⁾

隠棲の空間は失われることが予定されていて、すべては悲観的な色調に彩られる。

一八三三年における『オーベルマン』二版の発行や『イザベル』の刊行が後続世代による発見とはその慫慂の結果なされたとするなら、当時彼がもつとも努力を傾注していたとされるのは、すでに一八一九年には初版を刊行していた『自由な瞑想』の全体的書き直しであった。⁽⁷⁹⁾そこではより抽象的な考察が展開され、哲学的な色彩が濃厚になっていく。けれどもこの著作においてもなお隠棲と孤独の利点がきわめて具体的に説明され、素朴な自然の中に抱かれて暮らすことが推賞されるのであった。瞑想者はある仙郷にたどり着いたことがあった。

「夕暮れ前になって私は森におおわれた丘に周囲を囲まれた広い草地へと出た。あたかも生まれ故郷に戻り着いて人が歩みを止めるかのように、世間の人たちからは知られていない隠れ里に私は足を止めた。岩壁の間には村が一つあるきりで、幾筋もの激流が、木々の間の暗がりの中に、白く浮かび上がって見えていた。その谷には必要のものがあつた、またそれ以外のものはなかった。それは子供の頃の読書によって私が漠然と願ひ欲していた住処のつつましやかな図であつた。⁽⁸⁰⁾」

山懐の寒村、激流、山嶺、この書物に描かれる平安な境遇とはまさに『オーベルマン』における描写の再現に他ならない。それこそが彼の探し続けた安住の地のイメージであつたのであろう。虚構や想像が織り込まれているとはいえ、彼にとってスイスあるいはフォンテヌブローの体験がどれほど根源的な願望に合致し、その後の人生において結晶化していたかを物語るものでもあろう。繰り返せば一八〇三年以降彼はスイスに足を踏み入れることはなかったのである。

けれども彼が夢想する孤独とはいまやより現実的、社会的なものになる。

「正義を好む人々は孤独の価値を知っている。しかし孤独に完全な孤立を求めるわけではない。義務をよく果たすことを望むためにも、何人かの人々の近くにすることはよいことであらう。その人達が少数であれば、我々が望

めば、我々の自由が保証されるであらうから。⁽⁸¹⁾」

つまり社会関係を捨て去ることは、第一に賢明でなく、そして第二には実現不可能なことであった。それは彼の実体験、隠遁者たらんとしての生活の中で彼と接触を保った少数の人々との軋轢からもたらされた、不本意で否定的な経緯の反映であつたかもしれない。

「隠棲の場として美しい空の下、人知れぬ土地を選ぶと、私はそれ以外のことはすべて等閑視してしまった。やがて住民達は排他的な様子を見せ始めた。(……)彼らの内のいくたりかは荒っぽいと言うよりはおぞましい方法で私を排斥する計画を立てた。このようにたくらまれた敵意を鎮めることは困難であつたろう。私は気候はそれほど快適ではないがいつも健康的ではある別の土地へと移った。⁽⁸²⁾」

自然に抱かれた素朴なはずの人々でさえ隠遁者の自由を保証するものではない。彼の体験も思索も人間が社会的動物であるという状況を超えることがなかった。それはその出発点における自己認識の特徴でもあった。社会的存在としての自己規定と、社会とは両立し得ぬ自意識の葛藤は長く彼を苦しめてきた。幾多の体験を経て老いたセナンクールが実感するのは、個人に対する圧倒的な脅威として社会が常に存在し続けて、個我の抵抗は虚しく終わらざるをえないということであつたのだろうか。これは『イザベル』における隠棲の悲劇的結末とも符合しているだろう。

このように隠棲という主題は、一八三三年の時点において複数の作品で取りあげられ、異なる結末を提示する。一つは『オーベルマン』に見られるその希望的結末であり、もう一つは『イザベル』、『夢想』、『自由な瞑想』に描かれるその悲観的結末である。作者自身が後者の考えに傾いていたであろうことは想像に難くないが、いずれにせよ彼は隠棲に対して強く執着していたことが改めて理解される。隠棲の空間が穏やかな幸福に包まれるにせよ、社会の破壊的力によって蹂躪されてしまうにせよ、隠棲と社会の対立関係が明瞭に位置づけられていることに変わりはない。かつてスイスに出奔した時のように隠棲の効用や可能性を素朴に信じることはもはやかなわぬことなのであり、著者は

その限界や脆弱を認識せざるを得ない。にもかかわらず彼が出奔隠棲の主題を拘泥せざるを得ないなら、それは隠棲という生活形態がいかに深く彼を捉えていたかを示すものであり、二種類の結末はそのままこの行為の意義と有効性に対して彼がアンビヴァレントな感情を抱いていたことを表しているだろう。矛盾を堪えて生きること、悲劇的結末を予期しつつも努力を重ねること、それは彼が『オーベルマン』二版に書き加えた名高い一節にも示されている。

「人間は滅びる。そうかも知れない。だが抵抗しつつ滅びよう。」⁽⁸³⁾

セナンクールは晩年宗教論を構想し、複数の作品の執筆を進めていたとされるが原稿の存在は現在確認できない。⁽⁸⁴⁾

しかし一八四〇年に刊行された『オーベルマン』第三版は、新たな書簡をつけ加えて、老境に入ってその軌跡を総括しようとする彼の率直な感懷をよく伝えているように見える。それはサン・ベルナル峠における遭難の回想であつて、身体を自由を奪い生活の困窮をより深刻にする結果をもたらした作者青年期の実体験であつたが、その事実にはそれまで触れられることがなかった。さながらイカロスの飛翔のように、彼にとって人生最高の高みへの到達こそが以後の人生における失寵を決定づけたのである。オーベルマンは無謀にも登りつめようとしたアルプスの氷河の中で死と隣り合わせになりながら、法悦の境地に浸っていた。

「今日に至るまで、僕がもつとも生氣にあふれ、自分に対してもつとも不満が少なく、幸福の陶醉にもつとも近かつたのは、骨の髄まで凍えて、懸命の努力と生きたいという欲求に困憊しながら、気づくまもなく何度か崖から崖へと突き落とされ、生きて脱出できたのを不思議に思いながらも、そばで見ている人もいない単なる自分の誇りの中でこう一人ごちていたこの二時間のことであった。今この瞬間にもまだ僕は自分の欲すべきことを欲し、したいことをしているのだと。」⁽⁸⁶⁾

それは作品冒頭で記された主人公のアルプス体験のさらなる展開であり、物語全体の意味を改めて決定しさえするだろう。自己がその意識を失うことなく能動的なままに活動しながら巨大な存在との同化を果たす。自我の消滅という

よりは自我の拡大によるその超越といえようか。自意識によって絶えず苛まれていた人間にとってそれは問題の積極的方法による解決であった。だが至福をつかの間の非日常的空間時間の中で実現しながらも、それを再び体験する可能性を永遠に失ったという決定的失寵の記憶は彼の内奥に深く刻まれ、そして隠されていたのだった。このような神秘的体験を密かに経ていたのであれば、イマンストロームでの静謐も平穩も所詮は幻滅を堪えるためのものでしかないだろう。つまりセナンクールが、そしてその代弁者としての主人公が執着した隠棲という行為も身体の不具によって強いられた不本意な必然にすぎず、主体的選択の結果ではなく、否定的な相があらわになる。そのとき彼らが堪えねばならぬ幻滅とは重層的なものであつて、世俗社会に対する幻滅であると同時に世俗社会に参加することを拒絶された幻滅であり、神々しいアルプスの山嶺にとどまることのできなかったものの幻滅であると同時に再びその地点に到る能力を奪われた幻滅でもあるだろう。隠棲の場は淨福の高みからはるかに下つて、汚濁の社会の周縁にかりうじて位置していた。

セナンクールの最晩年は病苦のゆえに暗澹たるものであり、『オーベルマン』の名も忘れ去られ、一八四六年彼が死亡した時にはわずかな新聞がそれを短く伝えただけだった。娘によって『自由な瞑想』の中から選ばれ、墓碑銘として刻まれた一節、

「永遠よ、我が休息の地たれ。⁽⁸⁷⁾」

はおそらくセナンクール最後の、そして真正の安住の地を示しているだろう。

(1) Etienne Rivert de Senancour, *Oberman*, éd. par Béatrice Didier, Livre de poche, 1984, Lettre première, p.23 sq. 以下の引用も初版に基づくこの版による。

- (2) *Ibid.*, Lettre III, p.34.
- (3) *Ibid.*, Lettre VII, p.66.
- (4) Joachim Merlant, *Senancour*, Fischbacher, 1907, Slatkine, 1970, p.296.
- (5) その間の事情については、Sainte-Beuve, *Les grands écrivains français, XIXe siècle, les romanciers*, Garnier, 1927; Joachim Merlant, *op.cit.*、を参照のこと。
- (6) André Monglond, *Le journal intime d'Oberman*, Arthaud, 1947.
- (7) Marcel Raymond, *Senancour, sensations et révélations*, Corti, 1965; Béatrice Le Gall, *L'imaginaire de Senancour*, Corti, 1966.
- (8) Joachim Merlant, 《Introduction》, in *Senancour, Réveries sur la nature primitive de l'homme*, Droz, 1939, t.I, p. IX.
- (9) ただし最晩年には著作集という形での集成をも模索していた。Guy Michaut, *Senancour, ses amis et ses ennemis*, Sansot, 1910, p.161.
- (10) Cf. Zvi Levy, *Senancour, dernier disciple de Rousseau*, Nizet, 1979.
- (11) *Senancour, Les premiers âges*, Slatkine, 1968, p.70.
- (12) 彼の個人的境遇の悲惨、革命によつて窮乏を余儀なされたことなどは、Eulalie V. de Senancour, 《Notice biographique sur E. de Senancour》; Vieilh de Boisjolin, 《Vie de Senancour, dans la Biographie universelle des contemporains》, in G. Michaut, 《op.cit.》、なおユリ・ド・セナンクールは作家の娘であり、後半生における協力者でもあった。
- (13) *Les premiers âges*, p.1.
- (14) *Ibid.*
- (15) この初版の扉にも、作者の名前の代わりに「アルプスの夢想家」と記されている。同じく扉には刊行地パリと記されているが、レーモンによればこの著作が印刷されたのはヌーシャテルであったとされる。それが当時の出版検閲状況の故であったことは想像に難くないが、セナンクールにおける文化的同一性がフランスに根ざしたものであることを示すものでもあるだろう。オーベルマンによつて語られることでもあるが、セナンクールにとつて書くことは自身の存在理由と結びついていたのである。
- (16) *Senancour, Générations actuelles*, Droz, 1963, p.35.

- (17) *Ibid.*, p.87.
- (18) *Ibid.*, p.60.
- (19) *Ibid.*, p.82.
- (20) *Ibid.*, p.98.
- (21) *Ibid.*, p.195.
- (22) *Ibid.*, p.67.
- (23) *Ibid.*, p.104.
- (24) *Ibid.*, p.179.
- (25) Senancour, *Aldomen ou le bonheur dans l'obscurité*, Les Presses françaises, 1925, p.12.
- (26) *Ibid.*
- (27) *Ibid.*, p.79.
- (28) *Ibid.*, p.45.
- (29) Cf. André Monglond, *Le préromantisme français*, Arthaud, 1930 ; Pierre Moreau, *Ames et thèmes romantiques*, Corti, 1965 ; Pierre Naudin, *L'expérience et le sentiment de la solitude*, Klincksieck, 1995.
- (30) Senancour, *Réveries sur la nature primitive de l'homme*, éd. par J. Merlant, Droz, 1939, t.I, 《Préliminaires》, p.6 ㊦ ㊧一八〇二年にはこの著作の緒言と二つの夢想のみが部分刊行された。
- (31) *Ibid.*, Onzième rêveries, p.151 sq.
- (32) *Ibid.*, p.154.
- (33) この限定された空間、囲い込まれた狭い領域という概念は、自我の拡張が他への依存ひいては悲惨に結びつかざるを得ないという認識に対置されて、唯一個我の独立と幸福を守りうる状況としてすでに彼の最初の著作において想定されていた。Cf. Roger Braunschweig, 《Introduction》, in Senancour, *Les premiers âges*.
- (34) これが時代の政治的熱狂に対する反発であることは繰り返し返すまでもない。Cf. Société des études robespierristes, *Patriotisme et nationalisme en Europe à l'époque de la Révolution française et de Napoléon*, 1973.
- (35) Saint-Beuve, *Les grands écrivains français, XIXe siècle, les romanciers I*, Garnier, 1927, p75 ; Jules Levallois, *Un*

précurseur Senancour, Champion, 1897, p.89.

(36) André Monglond, *Le journal intime d'Oberman*, Arthaud, 1947, p.73 sq.

(37) André Monglond, *Vies préromantiques*, «la jeunesse de Senancour», Les Belles Lettres, 1925, pp.123-187; André Monglond, *Jeuneses*, «le mariage de Senancour», Grasset, 1933, pp.217-285.

(38) Senancour, «Déclaration essentielle», in G. Michaut, *op.cit.*, p.139.

(39) 「かくて私は破産した。」*Oberman*, Lettre XXXV, p.131.
「祖国からは断罪され、世俗の人の目には非難されるべき存在である。」*Ibid.*, Lettre XII, p.171 だがそれらの記述は決して具体的にはなっていない。

(40) Cf. Michael Call, *Back to the garden*, Anna Libri, 1988, «Oberman and the search for Eden», pp.57-94.

(41) *Oberman*, Lettre XXX, p.116.

(42) *Ibid.*, Lettre LIII, p.267.

(43) *Ibid.*, Lettre LXV, p.321. つけ加えれば作者自身は家族をも祖国をも、曲がりなりにも、所有していた。

(44) *Ibid.*, Lettre LXVI, p.324.

(45) *Ibid.*, Lettre LXVIII, p.331.

(46) *Ibid.*, Lettre LXXXIII, p.388.

(47) Senancour, *De l'amour*, Ambert, s.d., p.33.

(48) Senancour, *Valombre*, Droz, 1972, p.4.

(49) *Ibid.*, p.20.

(50) *Ibid.*

(51) Cf. Zvi Levy, «Introduction», in *Valombre*, p40 sq.

(52) 一八〇九年版と旧作群の比較対照は、G. Saintville, «Introduction», in Senancour, *Réveries sur la nature primitive de l'homme*, t.II, Nizet, 1981に詳しい。この『夢想』第二版はそれまでの様々なテクストがまさにモザイク状に配され、加筆されたものであって、その扉見返しには、『オーベルマン』第一部は決して出版されない。また『オーベルマン』第一部は決して再版されない」と記されている。

- (53) *Rêveries*, t.II, p.107.
- (54) *Ibid.*, p.107.
- (55) *Ibid.*, p.111.
- (56) *Sainte-Beuve, op.cit.*, p.76.
- (57) Joachim Merlant, *Bibliographie des oeuvres de Senancour*, Slatkine, 1971 (1905) ; B. Le Gall, *L'imaginaire de Senancour*, t.II, 《Bibliographie》.
- (58) De Senancour, *Napoléon*, Laurent-Beupré, 1815, p.1. 彼が自分の名前にいわゆる貴族の小辞を冠していることも一つの社会的態度の表明として考えることがふさわしい。
- (59) *Ibid.*
- (60) *Ibid.*, p.5.
- (61) J. Merlant, *Senancour*, p.199.
- (62) *De Napoléon*, p.9 sq. ただしオヴィエ (Owhyhée) のなんたるか、どこにあるかは不明。
- (63) *Ibid.*, p.17.
- (64) *Ibid.*, p.15.
- (65) 《Quelques réflexions sur la guerre》, in *Mercur de France*, avril 1814 ; 《Sur les hommes illustres》, in *Mercur de France*, juin 1814 ; 《Sur la campagne de France de 1814 par P.F.F.J. Giraud》, in *Mercur de France*, octobre 1814 など。ただし戦争の悲惨や国家の栄光というものはらむ前近代性などについてもセナンクールは指摘しているから、現実の統治者としてのナポレオン評価と英雄個人に対する評価の間には隔たりがあったといえるだろう。
- (66) J. Merlant, *Senancour*, p.181.
- (67) Cf. E. V. de Senancour, 《Notice biographique》.
- (68) たとえば一八一六年にはシャトブリアンの『キリスト教精髓』への反論『キリスト教精髓に関する考察』 *Observations sur le Génie du Christianisme* を発表していた。そこに時代の寵児になりお世話したルネの創作者に対する烈々たる対抗心が働いていたことは否定できないであろう。ただオーベルマンをルネの模倣と見なされることを肯じていなかったというよりも、己の感受性、己の存在の独自性を擁護しようという意志が働いていたとも見るべきであろう。おそらくセナンクールはオーベルマ

ンを創造するに当たってルネを知ることとはなかったであろうから。

- (69) その詳細については、*Oberman*, éd. critique par G. Michaut. Droz, 1912-1913を参照のこと。なおオーベルマンの綴りについては、初版がN一つであったのに対し、第二版以降はNを二つ重ねるようになった。主人公のゲルマン的性格を強めるためにも推測される。 Cf. Béatrice Didier, *Senancour romancier*, Sedes, 1985, p.311.

- (70) *Oberman*, Lettre XC, p.432.

- (71) Senancour, *Isabelle*, Abel Ledoux, 1833, Slatkine, 1980, p.9.

- (72) Senancour, 《Lettre inédite à Sainte-Beuve》, in J. Merlant, *Bibliographie*, p.61.

- (73) 一八四〇年第三版にジョルジュ・サンドがつけた序文によれば、「懷疑、それがオーベルマンであり、そしてオーベルマンには三〇年ほど早く生まれすぎたのであって、実は一八三〇年以降の精神的風潮の体現に他ならない。」*Georges Sand*, 《Préface》, in *Oberman*, Charpentier, 1840, p.15.

- (74) 女主人公は一人作品を孜孜として書き続けてもいて、それが彼女の存在証明でもあった。『オーベルマン』に見られた書くという行為に対する意義付けに共通するものもあり、セナंकール自身の決意をも反映しているだろう。だが『イザベル』にあつては女主人公の死とともにすべては焼失してしまう。プルースト的自己発見、自己探索の物語は終末にいたってまさに烏有に帰するのであって、彼女の生は、その係累もろとも、虚無の中に回帰するのであった。この点においても『オーベルマン』二版とは対照的である。

- (75) B.Didier, *Senancour romancier*, p.224 sq.

- (76) Senancour(sic), *Rêveries*, Abel Ledoux, 1833, p.53.

- (77) *Ibid.*, p.133.

- (78) *Ibid.*, p.318.

- (79) E. V. de Senancour, 《Notice biographique》, p.137; B. Le Gall, 《Introduction》, in Senancour, *Libres Méditations*, Droz, 1970, P.9 sq.

- (80) *Libres Méditations*, XXIIIe méditation, p.224.

- (81) *Ibid.*, XXVe méditation, p.234.

- (82) *Ibid.*, XXIe méditation, p.217.

- (83) *Oberman*, Lettre XC, p.429.
- (84) E. V. de Senancour, 《Notice biographique》.
- (85) (57) や参照(ハ)ノ。
- (86) *Oberman*, Lettre XCI, p.443.
- (87) E. V. de Senancour, 《Notice biographique》, p.141.